実践女子大学・実践女子大学短期大学部　公開市民講座　国文学科

宮沢賢治生誕 120 年記念

2016.
10.29
[sat]

宮沢賢治の愉しみ・研究の現在とこれから

運営・司会：**栗原　敦**氏
実践女子大学
文学部国文学科　教授

小説や童話、詩を通じて独特の世界観を創り上げ、今なお多くの人に愛されている宮沢賢治。その生誕120周年を記念する今回、第一部では３名の研究者が賢治研究の現状と今後の展望を語るとともに、賢治の実弟・清六氏の孫であり宮沢賢治記念館で学芸員を務める宮沢明裕氏が昨年リニューアルした記念館の様子と新たな試みについてお話しされました。第二部では、賢治作品の語り活動を行う「クラムボンの会」のお二人による公演が披露されました。

《第一部》　パネル・ディスカッション

「宮沢賢治研究の現在とこれから」

宮沢賢治研究者の３名が、それぞれが展開してきた研究の内容と今後の抱負などをプレゼンテーション。宮沢明裕氏には、2015 年にリニューアルした宮沢賢治記念館について紹介していただきました。最後に、各人の発表を踏まえてディスカッションを行いました。

私の研究姿勢を培ったもの

栗原　敦氏（実践女子大学　教授）

私の賢治研究は、筑摩書房の四二年版宮沢賢治全集を読むことから始まったといえます。伝記や研究史については、境忠一『評伝宮沢賢治』を頼りに、研究的な取り組みに向かうことになりました。その他、分銅惇作先生の「銀河鉄道の夜」論（これは私の大学入学前に発表されていたもので、国文学研究の方法による初めての論考です）や詩鑑賞、天沢退二郎さんの『宮沢賢治の彼方へ』、小沢俊郎さんの諸研究、奥田弘・小倉豊文さんといった先人の仕事、さらに賢治論を超えて入沢康夫さんの『詩の構造についての覚え書』、天沢さんの「作品行為論」、吉本隆明さんのすべての著作、また三浦つとむさんの弁証法や認識と言語に関する論考、鮎川信夫さんの戦後詩の思想と詩的表現をめぐる導き、森有正さんの〈経験〉に関わる思索などにも感化されました。これらから影響を受けて思想・宗教的背景と作家存在の関わりについて考察を深めようと、修士論文『「農民芸術概論」の思想について』に取り組みました（これは研究同人誌「近代文学論」で「宮沢賢治論（一）（二）（三）」として未完のままに終わったものの素材・原型となりました）。

この時期、『校本 宮沢賢治全集』が刊行されました。その数年後、金沢大学に務めましたが、大学図書館に所蔵されていた暁烏敏文庫に宮沢政次郎（賢治の父）の書簡があることを知って、作品研究と思想、歴史社会的事実との交錯の密度を高める必要を痛感し、研究姿勢を整え直しました。以後、私の賢治研究のすべては、この水準を意識したものでなければならないと自覚してきました。今では、一般的にそれを「表現過程論（表現行為論）」とでも言うべき文学観としてイメージしていると考えています。

ダルゲからダルケへの変遷を考察する

杉浦　静氏（大妻女子大学　教授）

私が宮沢賢治研究に進んだのは、天沢退二郎さんや入沢康夫さんといった研究者の著作との出会いがきっかけになっています。お二人の著作に触れて、「賢治の作品はこんなに面白いものなのか」と思い、自分もそれを研究する道に進んでいきました。賢治作品の面白さについて、『校本 宮沢賢治全集』には「（前略）作品それぞれに、空間の三次元に対する第四の次元である『時間』の軸に沿って、あたかも一個の有機体のような成長と脱皮と転生をくり返させること（後略）」とありますが、これはどういうことだろうと興味を感じ、実際にその作品を読んでみるとまさにその通りだと思いました。では、なぜそのように作品が変わっていけるのか、それは作者が絶えず変化しているからではないかという発想から研究に入っていきました。

現在は、宮沢賢治作品の「〔われはダルケを名乗れるものと〕」の変遷について考察しています。1931 年ごろ執筆された文語詩に〔われはダルケを名乗れるものと〕とある表現が、1928 年 9 ～ 12 月頃に赤インクで記入された時には〔われはダルゲを名乗れるものは〕となっていました。また、1921 年 11 月付の散文（タイトル「ダルゲ」を後に「図書館幻想」に改題）にもダルゲが登場していました。この、ダルゲからダルケへの変化がなぜ生じたのか、また散文「ダルゲ」にあった「西ぞらの / ちゞれ羊から（後略）」という一節が後に削除されたのはなぜか、といったことを賢治の作品や草稿、心象スケッチを時系列で追いながら見つめ、散文「ダルゲ」と文語詩におけるダルケはモチーフを異にしているのではないかという考えを持つに至りました。この一連の考察を、「文学」（岩波書店）2016 年 1・2 月号で発表しました。

岩手県の農業状況から賢治作品をとらえる

大島　丈志氏（文教大学　准教授）

私は、宮沢賢治やその作品を歴史の一部としてとらえようというスタンスで研究をスタートさせ、岩手県の農業をめぐる状況から宮沢賢治とその作品を考察してきました。岩手県が位置する東北では、1902･1905 年に大凶作、1913 年に凶作が起こっています。基本的には冷害がその原因となっています。その後、品種改良などに取り組んだ結果米の収穫高は増加しましたが、昭和に入ると米価が低下しました。こうしたことを背景に、賢治自身、米に頼らない農業の形を模索したようです。例えば、チューリップなどの花卉や白菜、トマトなど、寒冷地に適した農作物をつくる試みを行っています。1929 年には県農業団体の会報でも花卉栽培

を取り上げており、賢治の実践はただ空想的なものではなく、自分なりにできることをやろうと考えてのことだったと推測されます。

こうした試みは「グスコーブドリの伝記」に活かされました。この作品は成立過程で下書き稿から3分の2に量を削減されたほか、冷害対策で成功した農家の人についての描写が加筆されたり、作中の家族像が変化したりしています。また、ブドリに乱暴を働いた農民が謝罪に来るシーンもなくなっています。これにより、主人公ブドリだけが偉いのではなく、さまざまな人がさまざまな人生を生きていい、という共存の形を描こうとしたのではないかと考えられます。

今後は、東北砕石工場の活動や、産業組合・労農党と賢治との関わりといった賢治の農業思想についての考察を深めるとともに、その作品と農業思想が後継者たちにどう受け継がれていったか、また賢治作品における童謡の位相などについて追究していきたいと考えています。

宮沢賢治記念館のリニューアルと今後

宮沢　明裕氏（宮沢賢治記念館上席主任（学芸員））

私は現在、宮沢賢治記念館で学芸員を務めています。今回は記念館のこれまでを振り返るとともに、今後どういった役割を担うかといった展望をお話したいと思います。

宮沢賢治記念館は賢治の50回忌に当たる1982年に創設されました。年間約13～20万人の方が訪れ、昨年8月1日には入場者数700万人を突破しました。賢治の草稿のほとんど（約3,200枚）を収蔵していることが当館の強みだと考えています。

2015年4月25日、記念館をリニューアルオープンしました。常設展示室は開館以来の大幅改修を行い、大型スクリーンを設置して賢治の心象世界を映像で表すとともに、科学・芸術・宇宙・宗教・農の5分野から、関連資料を展示することとしました。そして直筆原稿や草稿類を公開する場として、新たに特別展示室を設けました。

従来、直筆原稿や草稿類を置く環境はありませんでしたので、このたびの改修で「実物を展示する」ことについてずいぶん考えさせられました。リニューアル以降、2016年10月現在で2つの特別展を実施しましたが、このうちの1つ「賢治の青春」展で、大正時代に賢治たちがつくった文芸同人誌『アザリア』全6冊を公開しました。これは以前、記念館で常設展示していましたが、劣化が進んで取り下げたものです。特別展での公開にあたり、脱酸処理や修復を全冊に施しました。今後は他の資料や直筆原稿、草稿についても必要であれば修復し、公開していきたいと考えています。

開館以降の30年は、皆さまの熱い思いに支えられた時間でもありました。今、私がしなければならないことは、これからの30年をどうしていくか、皆さまに賢治の足跡をどのようにご覧いただくかを考え、実践することだと思っています。

ディスカッション

大島：宮沢さんと杉浦さんにご質問をよろしいでしょうか。宮沢さんには、「宮沢賢治記念館と観光」について、今後の展望をお聞かせいただきたい。杉浦さんには、今後の全集のあり方についてお考えを教えていただきたいです。

宮沢：記念館に来るお客さまの中には賢治を知らない人もおり、そういった方にも楽しんでいただけるものを用意しなければいけないと常々考えています。記念館の周辺には宮沢賢治童話村などの施設もありますので、そういった所との連携を強化して多くの方に総合的にお楽しみいただける場をつくることが必要だと思っています。

杉浦：私と栗原さんが編者を担当し、筑摩書房より『宮沢賢治コレクション』全10巻が刊行されることとなりました。童話や短編などの散文や口語詩・文語詩、論考など賢治作品のほぼすべてを網羅するとともに、文語詩と短歌をのぞいて現代仮名遣いで表記しました。賢治作品の愛読者から若い方まで幅広く読んでいただける、新しい全集の形を提示できたのではないかと思います。そして今後、全集のデジタル化が進んでいくのではないかと考えています。デジタル化すれば、草稿と最終形を並べて対照させながら読むことも可能になります。新たな解釈を提示したり、自分なりの作品観をつくり上げることもできるようになるかもしれません。全集が、そういう新しい楽しみ方を提供する存在になっていったらいいなと思います。

栗原：社会が分断され格差が広がるなど、賢治が生きた時代と現代は通じるものがある気がします。そうした状況にある今の時代において、新たな全集の発行、またデジタル化に向けた機運が生まれることを、賢治も喜んでいるのではないでしょうか。

《第二部　クラムボンの会・ひとり語り公演》

「クラムボンの会」は、女優・林洋子氏が1980年に設立し、宮沢賢治のひとり語り公演を行っている会。
2015年より語り芸の後継者として加わった巌谷陽次郎氏と林氏のお二人がそれぞれ熱のこもったひとり語りを披露し、会場を魅了しました。

■よだかの星

（二代目語り／巌谷 陽次郎、アイリッシュハープ／小林 秀吏）

▲幻想的なアイリッシュハープの音色が、作品にさらなる深みをもたらしました。

▲歌とともに、哀切なよだかの心情を迫力ある語りで表現した巌谷氏。

■なめとこ山の熊

（一代目語り／林 洋子　薩摩琵琶弾き語り）

▲琵琶を手に、岩手の方言を忠実に用いながら語りを展開した林氏。

▲会場には多くの来場者が集まり、磨き抜かれた語り芸を堪能しました。

来場者アンケートから（抜粋）

- ひとり語りを初めて拝見しました。読んだことのある作品の一味違った魅力を味わうことができ、面白かったです。（女性／20歳代／その他）
- 専門的に研究されている方々のお話がとても勉強になりました。一部・二部と構成の違った取り組みは興味深く楽しいものでした。（男性／50歳代／渋谷区在住）
- ひとり語りが大変良かった。賢治の世界に浸ることができました。（女性／60歳代／本学卒業生）
- 4名のプレゼンテーションが素晴らしい内容で、新たに知った要素も多く、参加した意義があったと感じました。（女性／70歳代／その他）